

コミュニティ・ソング【3】

《第九》コミュニティ



加藤良一 令和4年(2022) 9月25日

日本では、年末になると多くのベートーヴェンの交響曲第九番演奏会が開かれます。ふだんはあまりクラシック音楽に触れる機会がなくても《第九》だけは聴くという方もおられます。それほどまでに《第九》は人々のあいだに浸透しています。

そして、日本全国どこにでも《第九を歌う会》という組織があります。これはアマチュア合唱人にとって、クラシック音楽と接する身近な機会となっています。これは紛れもなく《第九》コミュニティに他なりません。

鳴門「第九」を歌う会

日本で初めて《第九》が演奏されたのは、大正7年(1918)6月1日、徳島県板東町ぼんどう（現・鳴門市）の板東俘虜収容所ふりよでした。そこには、第一次世界大戦で捕虜となったドイツ兵約千人が収容されていました。捕虜は解放されるまでこの収容所で3年間過ごしましたが、そこでは極めて人道的な運営が行われ、朝晩の点呼以外は自由に生活することが許されたといえます。そうした自由な環境で捕虜たちは楽団を結成し、収容所内においてアジアで初めての《第九》を演奏しました。オーケストラ40人、合唱80人でした。ソリストはもちろん4人でした。

戦時中であつたにもかかわらず、“*alle Menschen werden Brüder*”（すべての人々は兄弟になる）と、世界平和や人類愛を歌い上げる《第九》が演奏されたのです。ドイツ兵の捕虜と収容所関係者、そして地元の人びとが国境や人種を超えて一体となった素晴らしい出来事でした。

鳴門市では《第九》発祥の地として、昭和56年(1981)、鳴門市「第九」を歌う会を発足させました。現在は、認定特定非営利活動法人^{*}鳴門「第九」を歌う会として活動しています。音楽による地域の活性化や国際交流を目的に、年間を通じてさまざまな活動を行っているようです。 <https://www.naruto-9.com/>

^{*}認定特定非営利活動法人とは、NPO法人として法人格を取得してから、2事業年度の実績判定期間において、所轄庁から一定基準を満たしたと認定を受けたNPO法人のこと。認定NPO法人とも呼ばれ、毎年度貸借対照表を作成している。

ロリン・マゼールも驚嘆した《第九》の人気

合唱指揮者・関屋晋^{せきやしん}さんが、著書『コーラスは楽しい』のなかで、《第九》の人気について象徴的だった出来事を紹介しています。

1994年、音楽の街、浜松市に完成したアクトシティ・ホール^{こけら}の柿落しで、ロリン・マゼール指揮の《第九》をやることになり、関屋さんは合唱指導として携わりました。当時、浜松には合唱団もあり、《第九を歌う会》もありましたが、より広く市民から募ることになりました。

ところが、受付開始から1時間ほどでなんと400人も応募してきたのです。その時点で締め切らざるをえませんでした。オーディションがあるわけではないし、歌える人もいれば歌えない人もいたはずですが。最終的には、とにかく歌いたいという人が360人になったといいます。あっというまにこれだけの人が集ってしまいました。とにかくすごい人気でした。

さて、マゼールさんが初めて練習会場に現れたとき、360人もの大合唱団を見て一瞬息をのみ、びっくりした光景は忘れられないといいます。関屋さんは、360人のバランスをどうとるか、ステージの並びはどうするか、かなりご苦労されました。それにしても、参加者たちの熱気は大変なもので一生懸命さが伝わってきたそうです。アクトシティの柿落しに参加し、さらにマゼールさんの指揮で演奏された方にとってはまたとない貴重な思い出となったことでしょう。

《第九》は最終楽章で、それまでの主題を打ち消し、新しい歌を歌おうと呼びかけ合ってフィナーレへ向かいます。関屋さんは「みんなで歌おうというのは、まさにアマチュア精神につながるものがあるとわたしは思います。手を取り合おうというシラーの詩に加えて、さあ歌おうという呼びかけが日本人の心に響く、そう考えていいのではないのでしょうか。しかも、歌う側からすれば、これほど歌っていても、指揮者ごとに表現がちがひ、新しい発見がいつもあるのです。」と《第九》の魅力を説いています。



笑話をひとつ…

部下が《第九》に出演するというので招待された課長、初めて聴いた《第九》が終ったあと、部下に「素晴らしい演奏だったね。感動したよ。ところで《第九》の前に延々とやっていたのはなんという曲かね？」と聞いたといいます。もちろん、これは1～3楽章のことですが、この課長は《第九》イコール4楽章「歓喜の歌」だと思込んでいたというわけです。

あらためてコミュニティとは…

コミュニティとは「共同体」や「地域社会」を意味することばですが、「所属」という概念とも同質と考えられます。ある組織に所属したいという意識や感情は、まずは家族、友人、仲間、共同体、国家あるいは宗教などにみられるように、人にとって重要なアイデンティとなることではないでしょうか。

いっぽう、IT用語では、インターネットなどを通じて特定の目的や話題について交流する人々の集合などを指しています。筆者がよく利用しているSNSなどもコミュニティサイトと呼ばれるものです。たとえば、facebookでは自身のサイトに加え「男声合唱プロジェクトYARO会」のサイトを持っています。さらに公開グループ「ポストコロナの合唱活動を考えよう」、「集まれ合唱!」、メンバー限定の「愉快の会」などのメンバーとなっています。Twitterも発信していますし、LINEではテニス仲間はじめ複数のグループに参加しています。

このように、私たちは、さまざまなコミュニティに所属し、そのネットワークの中で生きているわけです。

《第九》コミュニティ

渡辺 裕著【《第九》の現在地 —「芸術作品」と「文化」との交点で—】（東京音楽大学大学院博士課程後期課程2020年度博士共同研究報告書）と題する大変興味深い論文があります。

この論文の中で、《第九》のコミュニティ・ソングとしての位置づけを取り上げ、つぎのように述べています。いくつか引用しながら考えてみます。

特に《第九》の合唱に参加する人々は、単に「芸術作品」としてのこの曲も演奏者になったということ以上に、ある種の連帯感をもってひとつのコミュニティに参加したというような感覚をもつのではないだろうか。そしてそのような共同体感覚こそが、《第九》という作品の特異なあり方や、その独特の受容のされ方をもたらす源になっているのである。18世紀後半から19世紀にかけての西洋の近代社会が形を整えてゆく過程において、音楽が政治や宗教から切り離され、純粋な「芸術作品」としての地位を確立したという自律美学的なまとめ方は、実は多分に一面的である。その一方でこの時代は、さまざまな政治的・社会的機能を孕んだ音楽が隆盛をきわめた時代でもあり、極言すれば、政治にとって音楽が不可欠の存在になった時代でもあった。「コミュニティ・ソング」はその最も典型的なあらわれである。

コミュニティ・ソングは、「歌いながらの革命」といわれたフランス革命に端を発し、「とりわけ政治的な運動やデモンストレーションなどに際して、声を揃えて皆で歌うことによって結束を確認」するものではなかったかと、渡辺 裕さんは述べています。

そして、ベートーヴェンがフランス革命の音楽に大きな関心を寄せ、革命から3年後の1792年、22歳のときに、シラーの詩『**歓喜に寄せて**』と出会い、深い感動を受けました。いつかこの詩に曲を付けたいと心に秘めていましたが、晩年の54歳になってようやく《第九》として完成させたのです。

サントリー1万人の第九

こうして生まれた《第九》は、230年後の現在、とりわけ日本では特別なものになっています。というより大きく変容しているといつてよいでしょう。

その最たるものが**佐渡裕**指揮による「サントリー1万人の第九」です。今年は40回目の記念公演を12月4日(日)に予定し、3年ぶりに合唱団の募集を再開しました。しかし、コロナ禍で、規模を縮小し「2千人の第九」となってしまいました。それにしても十分大きな規模です。

ここに参加する方がたは、もちろん《第九》を心から愛してやまない合唱人だと思います。そして、世界的指揮者の元でなら、開催場所にかかわらずどこでも歌いたいという方でしょうか。《第九》コミュニティとしては日本最大です。演奏もさることながらフェスティバルとして楽しむ面が強いといえないでしょうか。おそらく世界の中でも類をみないものだと思います。

「サントリー1万人の第九」：<https://www.mbs.jp/daiku/>

ついでに今年の「2千人の第九」のレギュレーションをみると、「合唱よりも参加者の皆様の安全・安心が第一」ということで、合唱団参加者には会場レッスンや本番コンサートでマスク+ネックファンの使用が義務付けられています。但し、ホームページをみる限り、マスクでなくマウスシールドとネックファンを付けた写真が表示されているのはどういうことなのでしょう。よくわかりません。ネックファンの仕様についてはかなり細かく規定されており、ようは呼気（吐く息）を上方へ排気するような機能のものでないとダメということのようです。

また、リアルとオンラインをつないだ『1万人』の合唱も実施することです。練習期間は、9月から3か月間となっています。この期間設定はおそらく《第九》経験者を想定していることかと思います。初めての方の場合、3か月では厳しいのではないのでしょうか。

リモートレッスンダイジェスト：<https://www.mbs.jp/daiku/remote-lesson/>

埼玉県内最大！ 埼玉第九合唱団

以前筆者は、《第九》を毎年定期的に歌う**埼玉第九合唱団**に所属していました。しかし、その《第九》がコミュニティという概念とつながるとは思いもしませんでした。

埼玉第九合唱団は、昭和48年(1973)に設立され、多い時は180名もの団員を擁する大きな合唱団です。毎年暮れの演奏会で《第九》を演奏し、夏には別のオーケストラ付の曲で演奏会

を開くという常設の《第九》合唱団です。《第九》を一時的に集まって歌うのではないところが特長です。

<http://saitamadaiku9.sakura.ne.jp/#top>

団員は《第九》に大きな魅力を感じて歌い続けており、メンバーが多少出入りしてもコアの経験者がいるため、演奏レベルがある程度キープできる安定感があります。《第九》を核にしてさまざまな人びとが集い、歌い、あるときは懇親旅行をするなど、文字通りひとつのコミュニティを形成しています。

そうはいうものの、歴史と実力のある埼玉第九にとって現在のコロナ禍のダメージは相当大きなものでした。人数が多いだけに練習会場の確保が容易ではないからです。今年に入ってようやく活動が再開できましたが、復活にはまだ時間が掛かるかもしれません。



《第九》は「聴きに行く」だけでなく「自ら歌う」ところに他の楽曲との大きなちがいががあります。《第九》は決して易しい曲ではありませんし、歌詞がドイツ語という日本人にとって難しい部類の言語です。歌の前にまず発音から入らねばならず、相当な修練が必要です。それでも挑戦するのは、簡単に超えられない難易度の高さがあるからかも知れません。

アマチュア合唱人にとって、《第九》は何度歌ってもそのたびに新たな発見があり、容易には到達できない山の頂を目指さねばならないという、歌い甲斐のある曲なのです。

【参考資料】

- ・《第九》の現在地 -「芸術作品」と「文化」との交点で -
- ・文化としての日本のうた
- ・コーラスは楽しい

渡辺 裕 著
佐野 靖・杉本和寛 編著
関屋 晋 著



[Back](#)

音楽・合唱コーナーTOPへ

[Home](#)

HOME PAGEへ